

遂げ能はざる所である。兎に角人は、特に男子と生れた以上は、充分なる勇氣を持ち度いものである。其の中でも壯年時代には一層勇氣の漲り居らんことが望ましいのである。但し前にも述べた通り、勇氣にはまゝそれに伴ふ弊害があるから、殊に青年時代の如きは其の弊に陥らぬ様に注意しなくてはならぬ。青年時代に勇氣あるものは、兎角客氣に驅られて暴行をやりたがるものであるが、勇を好んで其の弊や亂といふやうになるなれば、寧ろ勇氣は其の人に取つて害を爲す事であるから、此の點は深く慎まねばならぬことである。

勇氣は如何にして養ふべきか

勇氣の形式的涵養

次に本問題たる勇氣の養ひ方に就いて少しく研究して見たい。一體勇氣はこれを先天的に享けて居る人もあるが、修養に依つて或る程度まで得ることが出来る。而して其の方法も形式的のものと、精神的のものと、二者に分るのである。形式的と假に名づけたのは、主として肉體の方からこれを養ふのである。其の最良手段としては柔道とか擊劍とかいふ修行法が昔から存在して居り、勇氣を養ひ膽力を鍊へるには是非共これに據らなければならぬ位になつて居る。元來眞に勇氣ある人の外形的の資格としては、身體が飽くまで強壯に、而して敏捷の者でなくてはならぬと思ふ。身體柔弱の人では平生其の勇氣を持續するに困難である。強壯なる身體を持つた上に武藝の修業をして置く

勇氣は如何にして養ふべきか

下腹部に力を込め

勇氣の養ひ方

三六四

のが最上の策である。又一の方法として、下腹部に力を込めることを平生心掛けるのも悪くない。それは何故かといふに、人は頭の方へ重に氣を奪はれて居ると、何事にも動き易いものであるが。それと反対に腹の方に力を注いでちつくりと考へれば、心もゆつたりと落附いて居られるから、勇氣を養ふ上には少からぬ効力のあるものである。古來の武術家の性格に徴するに、其の態度は輕躁でないのに舉動は頗る敏捷である。態度の輕躁ならぬは心を丹田に据ゑ居るからのこと、舉動の敏捷なのは平素の備へに缺くる所がない爲である。かゝる點から論じて、下腹部に力を込めて居ることは確かに効力ある一の手段であらうと思ふ。兎に角其等の修業を積むにしても、先づ第一の要素は

勇氣の内面的涵養法

身體の強健にあるから、此の根柢から築いてかゝることが肝要であらう。元來柔道は柔に受けて剛を制する所から柔道と名づけたものであらうが、これとても如何に柔に受けるとしてからが、肺病患者にはどうすることも出来ぬ。故に勇氣を養はんとする人の外形的要件としては、宜しく體力を強健にし然る後漸次に柔道なり、擊劍なり稽古をすることとしたが宜しからう。

精神的修養法

外形的修養を積むと同時に、内面的即ち精神の方からも修養を重ねてゆくことは、勇氣を養ふ者にとって閑却すべからざる方法である。

精神的修養法

三八六

精神的修養には如何なることが宜しいかといふに、眞の勇氣を養ふべき書物を読むとか、或はそれに關する説話を聞くかどそれである。併し書物も其の選擇を嚴重にしなければ却て弊害を生ずるが、眞正の意味に於ける武勇傳などを讀むのが一般に最も宜しい様に思ふ。例へば楠正成が湊川で敗戦すると知りつゝも、進んで戦つて潔く討死したとか、其の子正行が父の遺訓を守つて南朝の爲に誠忠を致したとか、榊原康政が五百の小兵を以て長久手に秀吉の大軍を阻み、小勢なれども整ひたる軍容に秀吉の膽を寒からしめた杯と云ふ、此等の傳記傳説は孰れも眞に心を養ふ用具になるのである。總て斯の如く沈勇とか、義勇とかに關した説話の書物なら何んでもよいが、同じ武勇傳中に蠻

勇、暴勇の方の側に屬するものがあるから、よく前者と後者とを混同せぬ様、此の選定に充分注意することを希望して置く。最後に一言附加したいことは、折角苦心して養つた勇氣でも、其の用途を誤つて暴戻なことに之を用ひるやうなことがあつては何にもならぬと云ふことである。世俗の諺に『小人玉を抱いて罪あり』とか『小兒に利器を與へた様なものだ』とか云ふことがあるが、一方仁、義、知といふ様な心の修養がこれに作うて居らぬと、玉や利器が却て害を爲すことになつて仕舞はぬとも限らない。されば勇を養はんとする人は平素此の點にも注意を怠らず、飽くまでも勇氣を有用に使つて貰ひ度いのである。

健康維持策

健康と精神との關係

自分は平生無病息災といふ性質でもないが、併し古來稀なりといふ七十歳を超しても、昔と餘り變つた事なく事務を取つて居るから、健康といふ問題に向つて、多少の所見がないでもない。勿論自分は醫師でないから學術的健康法に就いて喙を容れることは出来ぬ、當節流行の腹式呼吸がいよのか、サンドウの鐵啞鈴がいよのか、それとも冷水摩擦がいよのか、それ等の事は自分には殆ど解らぬが、併し是等學術的方法以外に、精神上から割出した健康法があるやうに思はれる。

精神的健康法

病は氣から

一體人は氣で持つもので、氣即ち精神の作用如何に由り身體は或る程度まで左右されるものである。彼の小心翼翼の人が何か難問題に逢着した場合、夜分も眠れないとか、或は食欲が減退したとか云つて、殆ど半病人のやうになることもあるが、是は即ち身體が精神の爲に衰弱した好適例である。斯の如く精神の力といふものは實に恐しいもので、『病は氣から起る』といふ世の諺にも眞理があると思ふ。人は常に精神さへ確乎として居れば、身體も之に連れて自然に壯健になる様である、自分も從來此の點に大に注意して、成るべく精神を沮喪せしめないやうに、又氣を何時までも若く持つ様に努めて來た。

江村專齋の養生説に就いて

嘗て『先哲叢談』の中に江村專齋といふ長壽者のことの出で居つたの
 を讀んだことがある。此の人は大阪落城時分から徳川三代將軍の治世
 まで生存し、百五六歳の長壽を保つて末年まで氣は確かであつたとい
 ふが、或る時人から養生の事を問はれたのに答へて『養生に三寡あり、
 色を寡し、食を寡し、思慮を寡くす』といふことを述べて居る。併し
 自分の考ではこれだけの答では未だ云ひ方が足りない様に思ふ。何故
 なれば、凡そ人間と生れて肉體的に、將た精神的に愉快を感ずること
 を行ふのが衛生に害ありと、云はれまいではないか。尤も女色なり飲

三寡

思慮を寡くするは
果して養生法なり

食なり節度を得ざれば身體に害あることは勿論で、各人各自の體質に
 應じて其の度を量ることが極めて肝要である。獨り女色と飲食とに
 限らず、其の度を過してよいことは何一つある譯のものではない。
 けれども第三の『思慮を寡くす』といふ一項に就いては大に研究に
 値するものがある。若し江村專齋の所謂思慮の二字が、字面に現れた
 通りに考案分別を意味するものとすれば自分は此の説には全然反對し
 なければならぬ。人は高年になつてからは唯ほんやりして居れば、身
 體の保養になるやうに思はれるかも知らぬが、もしも老人になつてか
 ら思慮分別を全く捨てて仕舞ふと壯健になるところが反對に虛弱にな
 つて仕舞ふ。現今は大に改良されたが維新以前の社會には、未だ相當

江村專齋の養生説に就いて

に活動の出来る春秋と健康とを有つて居ながら、家督を其の子に譲つて樂隱居の身となり、悠悠閑日月を樂むといふ風が一般に行はれて居たものであつた。斯んな具合にして居れば、江村專齋の所謂思慮は寡かつたに相違ないが、然らば其等の人々が果して健康を保ち長壽を得たかといふに、事實は全く反對で、左様いふ樂隱居の境遇に居た者に却て早く死んだ人が多い。其の身が専ら社會に立つて活動して居た頃には身體も強健、元氣も旺盛であつた者が、其の子に世を譲ると同時にがっかり弱つて仕舞つたといふ實例は、今日でも田舎には澤山ある。思慮を寡くする事が健康法に協つたもので無いといふことは、此の例に徴しても判ることであらう。

健康の大敵

併し江村の所謂思慮は左様いふ意味のものでなく、單に神經的下らぬ心配、即ち愚痴婆心の如きものを意味すとすれば、余も亦何等言ふ所はない。斯ういふ下らぬ心配は、健康を維持する上に著しい障害を爲すものであるから、出來得る限りにこれを除かなければならぬのである。然らば如何にしてこれを除くべきかといふに、學問を立脚地として精神修養の力に俟つより外はなからうと思ふ。元來人生は不足勝ちなのが常で、満足といふものは寧ろ有り得べからざるものであると言つてよい。此處の道理を篤と考へて、不足や不自由を世の常事と悟

不自由を常と思へ

つて仕舞へば、別に苦情も起らなければ下らぬ心配もない。凡て斯ういふ風に精神の修養を積んで行きさへすれば、萬事萬端それで埒が明く、古人の所謂『夫の天命を樂しみて復何をか疑はん』といふ境地が即ち夫れで、斯うなつて仕舞へば二も心を煩はされる物はなくなるのである。故に下らぬ心配はせぬ方がよいが、併し眞面目の思慮分別なら澤山に心を用ひた方が健康の爲には寧ろ樂である。前にも述べた通り思慮分別を捨てよ仕舞へば、却つて身體も精神も著しく衰へるものであるから、何でも樂隱居的な考を起さず、死ぬまで活動を廢めないといふ覺悟が肝要である。昔日と違つて今は老人とて仲々靜止しては居ない様な傾向が有つて、現に余が如きも既に四十歳になる子息を

死のまで
活動せよ

有つて居るが、互に別居して仕事も別にし父子共に負けず劣らず行つて居る。獨り自分ばかりではなく、斯ういふ風にやつて居る例は世間に幾らもある。兎に角何時までも氣を若く持つて引込思案をしないといふ事が、健康には何よりの良藥であるやうに思はれる。

余の實驗

思慮分別を盛んに使つた方がいよといふは既説の通りであるが、それにも亦程度のある事は云ふまでもない。徒らに喜怒哀樂の情を恣にして、下らぬ事に迄一々神經を痛めるといふ様なのは、眞の思慮分別ではなく、百害あるも一利なき愚劣な仕方である。とは云へ、人は

もとく、感情の動物であるから、全く七情を冷灰の如くにして、所謂『枯木寒巖三冬にも暖氣無し』といふやうな境遇に安住する譯にはゆかぬ。多少心を動かされるのは當然で、動かされぬのが寧ろ不思議と謂はなければならぬ。併し其の動かされるにも程合のあることで、其の程合如何に因つて人物に修養の有り無しが岐るゝ次第である。而して其の程度を節する工夫は、即ち學問に俟たなければならぬので、平生學問によりて精神を鍛鍊して置くことの必要は此處に在ると考へる。

學問の必要

余が壯年時代元氣もなかく、旺盛なものであつた。忘れもしないが三十一歳の時大藏省に職を奉じて居た頃には、三日三晩一睡もせず

三日三晩仕事を續けた

仕事を仕續けたことなぞもあつた。其の時は井上侯監督の下に大藏省の事務章程を作るのであつたと記憶するが、何しろ各局共何十條とある條文を三日間にやり上げなければならぬ。しかも性急な井上侯の命令であるから、三日間の中若半日も後れようものなら、それこそ目から火の出るほど小言を云はねばならぬので、何でも期限内に仕上げ、て仕舞はうといふ意氣込で仕事に着手した所が余と共に其の仕事に取掛つた連中は、二晩日には一人残らず兜を脱いで仕舞つたが、自分ばかりは到頭押し通して、三日三晩まんちりともせず働き續けたが、其の翌日になつても格別疲勞を感じなかつた。今は寄る年波で逆も其の時代の眞似はできないが、併し一晩位の徹夜は未だ平氣である。若い

人達が睡眠不足などと云ふのが却て不思議に思はれる位である。

余は醫術を信ず

近年は余も時々病魔に襲はれる所を見ると、身體は確かに衰へて来たこと、想像されるが、それでも病氣と云ふものを一向苦にしない。世俗にも云ふ通り、命と病とは別ものだといふ意氣組で、何でも彼でも、精神的に、所謂氣で勝つて居るが、それとても余は近來心靈萬能論者の説く所の如く、全然醫術を信じないといふがごとき愚は學ばない。精神力の力即ち氣は健康を保持する上に缺くべからざる要素であると共に、病體を健康體に復歸せしむるには、矢張り今日の如く進歩

した醫術に依頼しなければならぬと思つて居る。それ故病氣の時は、醫師に對しては極めて從順で、醫師の言葉の通りになつて居る積りである。斯く醫療を信ずるといふことも、健康を保持する上に於ては缺く可らざる要件で、彼の極端に心靈萬能を主張し、日進の醫術を價値もないものゝやうに排し去る人々の如きは、稍常識外れの沙汰ではあるまいか。健康維持策として平素に精神の補助が必要であると共に、病時醫療の必要なることも忘れてはならぬことである。

獨立自營

福澤先生の獨立自尊を駁す

福澤先生の獨立自尊を駁す

獨立自營

四〇〇

惟ふに獨立自營といふ言葉には二様の意義があらう。其の一は社會を相手にして考へた場合と他の一は自己のみとして考へた場合とである。如何なる場合に於ても、依頼心を出すことは善くない。何事にも獨立的精神、自營自治の心を持たなくてはならぬのは勿論である。けれども第一の場合の如く、國家社會といふものを向ふに置いて、極端なる獨立自營の心を持つてゆくのは如何いふものであらうか。斯かる場合から推究すると、彼の福澤諭吉先生の唱へられた獨立自尊といふが如きは、或は餘り主觀的に過ぎて居りはせぬかと思ふ。余は曩に「人生觀」中にも論じた如く、人ほ此の世に處するに方り總て其心を客觀的に持たなくてはならぬ、主觀的にのみ此の世の中を見るならば、其

の一人一人の爲ならなるかも知れぬが、遂に國家社會といふものを如何ともすることが出来なくなる。但し人は老若男女の別なく、總て君子賢人ばかりであるとすれば、此の主觀的主義も弊はないであらうが、若し世人が聖賢でなくて自己以外を顧みるの必要はないといふ結論に歸着するならば、所謂奪はずんば飽かずといふまでになつて仕舞ふであらう。人心が果して左様なつたとすれば、其の極端なる結果は恩人も忘れ、知人も捨て、愛する者も去つて恬然たるに至り、遂には反抗、侮辱、罵詈、嫉妬といふやうな、有らゆる醜惡なる行爲は遺憾なく羅列されるであらうと思ふ。故に人生に處するの道は單一なる「自我」とか「己」とかばかりではいかぬ。余はこれを客觀的に見ることの

福澤先生の獨立自尊を駁す

四〇一

獨立自營

四〇一

安全なるを思ふ者である。即ち自己は出来得る限りの知能を磨き、世に立つて人の世話にならぬは勿論、國家社會の爲に盡すことを主としなくてはならぬものだと思ふ。孔子は「身體髮膚これを父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり、身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯すは孝の終なり」と訓へられて居るが、これも仔細に考察すれば、名を後世に揚ぐるは獨り一身の爲のみならず、必ず國家社會の爲になるので、矢張り客觀的的人生觀を意味したものと謂つてよからう。

客觀的獨立自營に賛す

余は客觀的に人生觀を立つるものである。故に獨立自營といふことも主觀的には見たくない。即ち社會に對して自己を見る場合には、何處迄も社會と自己との調和を考へなくてはならぬ。國家社會は如何ならうとも自分さへ利益すればよいとか、自己に有利なる方法の爲には、他人に如何なる損害を與へようとも顧みぬとかいふが如きは余の斷じて與せざる所である。然し乍ら自己の精神、或は社會から全然引き離したる自己に對しては、飽くまでも獨立自營の心を養はなければならぬ。西哲の金言中に、「人は自己の額の汗に依りて生活するものなり」天は自ら助くる者を助く」などあるのは、極めて短語ではあるが、個中の消息を言ひ盡したものだと思ふ。

客觀的獨立自營に賛す

四〇三

凡そ人たる者が各自に働いて生活を立てるならば、其の人一人の幸福なるのみならず、社會も亦甚だ平和にして幸福なるものとなるであらう。自ら努力黽勉する者に對しては、天も必ず幸福を與へるとは此の意味を謂うたものだ、假令天が幸福を與へずとも、斯る種類の人は自ら幸福を招致するのである。故に人は獨立的精神を持ち、一切の依頼心を放擲し、自營して出るの覺悟を懐くことは、自己一人に取つては缺くべからざる要件である。けれども此の心掛は一寸誤解され易い。獨立自營の意味を、『他人の世話にならずに、自分のことは一切自分一人でやつて出よ』といふだけのことには解釋すれば難はないが、動もすればそれを曲解して、獨立自營とは『我あるのみ』とか『天上天下

唯我獨尊』とかいふやうに考へ惑ふものである。どうも日本人の間には斯ういふ思想があり勝ちの様に思はれる。西洋の學說にも數百年前に左様いふ個人思想が有つたとの事で、殊に英國の如き此の個人主義が強く流行した。爾後、漸次に其の學說が日本にも傳來したらしい。けれども斯の如きは假令先進國たる西洋の學說でもこれに倣ふことは面白くない。東洋人たる吾々は矢張孔子の『己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す』との旨意に従ふ方が穩當なる行爲であらうと思ふ。況んや西洋の學說も現時は之と同一傾向を帯びて居ると云ふに至つては、尙更道理は茲に存在することを知るに難からぬではないか。

自己本位を排す

獨立自營に關する説は西洋に於てすら今日では最早「吾あるのみ」といふ解釋ではなくなつて居る。即ち人たる者は弱い心を出してはいかぬ。飽く迄他人の世話にならずに獨立獨行せよといふ意味で、社會には自己一人あればよいといふ主義とは大に相違して居る。換言すれば一身を修むる上には大に心掛けねばならぬといふ訓誡であるが、社會に立つ上に用ゐてはならぬことである。更に言ひ換ふれば、自己本位を排しての獨立自營的精神、それが何人にも歡迎さるゝ所の行であるのだ。

自己本位
ならざる
獨立自營

然るに茲に注目すべきは、動もすれば自己本位とか個人主義でやつた方が、國家社會は敏速なる進歩が見ることが出来る論ずるものがある。其意味如何といふに、個人主義なら個人と個人との競争が起る。競争には進歩が伴ふものである。自己本位とても矢張其の通りであるといふのであるが、これは一方の長所ばかり見て短所を忘れた議論だから、余は左様いふ説に左袒することは出来ない。社會といふものがあり、國家といふものが成立して居ればこそ、富貴榮達も望まれるのであるけれども、若しこれが全く自己本位のみであるならば、社會の秩序、國家の安寧は攪亂されて、人は相撃ち相争はねばならぬこととなる。故に社會に交り、國家に盡す上には、是非共自己本位を排し、

自己本位を排す

此意味に於ける獨立自營を棄てなければならぬと思ふ。

獨立自營の意義

さて熟々獨立自營の意義に就いて考慮するに、何事も自己のことは自己一身に考へこれを處理して出るのが獨立で、又自己の定めたる方針に據つて生活を續けて行くのが自營であらうと思ふ。然るにこれを今日の家族制度から論ずれば、此の思想は絶對的に家庭なぞに行ふ事は出来ない様に思はれる。如何となれば其の家族中、小供等が各自に獨立自營の觀念を抱き、親の世話にはならぬ、自分の事は自分で處して行くといふ風になるならば、一家の中で家長の命令が利かなくな

家庭に於ける獨立自尊

る。家長の命令の行はれぬ時は、即ち家族制度破壊の時ではないか。此の意味から推考するに、日本の風習としては其の子供が學校を出る頃までは、家長が萬事指圖するのが當然だと思ふ。其の指圖というても、學才と資力と乃至境遇とに因つて相違あることは勿論であるが、現代の有様では學校を出た後に初めて世に立つ考を起すのが普通である。先づそれ迄は家長の指圖は免れぬ所であらう。日本人の獨立自治は、それから後のことでよい。惟ふに西洋でも小供時代は矢張り日本と同一であらうが、日本人は妻子を持つ様になつてからも親と同棲する風習があるから、悪くすると世に立つべき時に至つても、尙依頼心が失せ切らぬやうなこともある。それは西洋人と全く反對の現象で

獨立自營

ある。故に日本人は、殊に一人前として世に處する時代に到達したら親や近親の保護の有無に拘らず、獨立自營の觀念を抱くことに心掛くることが肝要である。

由來東洋の習慣として、王者が國を治める如く、家長は其の一族を治めて居る。此處は自治獨立的精神の旺盛なる西洋人に比して大に相違ある點で、此因習の久しき遂に東洋人をして他に依頼するの觀念を多からしむるに至つたと思ふ。彼の福澤先生が獨立自尊の說を唱へて以來、獨立心とか自營心とかいふものが、日本人の口の端に上ることが多くなつたが、慧眼なる福澤先生が早くより此の思想を日本へ輸入して、舊來の惡習慣を矯めんとしたのは、蓋し時に取つての好手段で

個人主義の餘弊

あつたに相違ない。但し此の手段は善かつたに相違はないけれども、福澤先生の說には未だ飽き足らざる者があつた。先生の說は彼の西洋の自由思想、個人主義を日本へ傳へたものであつたから、東洋舊來の陋習を革新する爲には効果が有つたには相違ないけれども、其の餘弊無きを保せぬと思ふ。併し今日行はるゝ獨立自營の思想は其の時代のものよりも大に進歩して居るから、前段縷説せるが如き邪路に入ることなしに、其の缺陷は明かに改め得らるゝことと思ふ。

獨立自營に關する舊來の見解

獨立自營の精神が自己一人に取つて必要なことは、上述せる所に

獨立自營に關する舊來の見解

山つて充分に了解されたことと思ふ。若し民は聖主賢君の治に依頼して自ら奮勵することを忘れ、子弟は家長の誘導教育に一任して自己の本分を盡すことを等閑に附するならば、自然と各自智を磨く必要もなくなり、其の働きを減ずる様になる、それでは人たるの本分に反く、故に子弟は或る年齢時期に達するまで親の補助を受けても、それから先に何處までも自己を立て通す心掛け、即ち獨立自營の精神を懐かねばならぬ。彼の他人の力に頼るが如きは自己を失ふの甚だしきものであるから、人は如何にもして他人の厄介にならぬだけの感念を持たねばならぬ。

論語を通覽するに、東洋の習慣に獨立自營といふが如きとの薄かつ

た爲か、的確にそれに對する教訓は殆どないが、人に依頼して其の助力を得る事は悪いものとの意味は述べてある。君子は言に誠にして行に敏ならんことを欲す」なぞとあつて、自己の事を行ふに飽くまで勉強しなくてはならぬとの意味を訓へたことは、他にも其の例が澤山ある。けれども『獨立自營』といふ意味を主として説いたものは一つもない。大學なぞにも治める者の方のことはかり丁寧に述べてあつて、被治者の方のことを云うて無いのは、矢張東洋人の依頼心の依つて來つた所以を窺ふの資料とも言つてよからうか、併し舊來の教訓中に其のことがあるにせよ、無いにせよ、今日の時代から見れば、己一身に取つての獨立自營は大に必要である。自己に弱い心を出し、他人

學問の俗人に必要な所以

四二四

に依頼せんとする心を矯める爲には、最も都合よき教訓であると思ふ、二十世紀の東洋人は、宜しく此の新意義の教訓を其の道徳中に加へ、以て其の行の完からんことを期せられ度い。

學問の俗人に必要な所以

多數教育家の尊臨は初めて

閣下、諸君、今夕の當俱樂部の晩餐會には、文部大臣閣下、文部次官、大學總長其他諸學校の管理をなさる、諸君の尊臨を請ひました次第でございますが、茲に會員を代表して、臨場を辱ういたしました大臣始め來賓の諸公に、一言の謝辭を申し上げます、サテ、吾々銀行

者が教育家諸君と斯様に密接な關係を惹起すといふことは、是れまでにあつたか知れませぬが、蓋し此の俱樂部に於て、斯く教育家諸君多數の尊臨を請うたのは、未だ初めてと申して宜からうと存じます。殊に文部省といふ官邊のみならず、民間に於て最も

有數な學校の諸君にも尊臨を

請ひ上げる積りで、慶應義塾では鎌田君の御出席を辱うしました、元來私共は平生錙銖の利を争ふ所の極めて俗人である。尊臨を辱うしました方々は學者である。此の學者と俗人といふものは、一見縁の遠いやうなものである。昔は學問を始めると最う商業は止めるのだ

有數な學校の諸君にも尊臨を

四二五

學者と俗人

學問の俗人に必要な所以

四一六

といふ如き時代もあつたのです、あつたところではない現に私杯は商業教育としては塵劫記と商賣往來の外受けたことがない人間で御座います、所が斯く文部大臣を始め大學總長、其他各學校長の尊臨を請うて斯の如く膝を交へて談話を換はすまでに至つたのは、商工業の大に進んだといふことを、既に業に證據立て得られるのでございますが、斯う申すと少し我が田へ水を引くやうに聞えるか知らぬが、俗人には學問の必要がないと、若し臨場の諸君が今日も尙ほさう思召すなら、それこそ大なる間違であります。

學問ほど俗人に必要

な者はない、それを誤つて學問と俗事とは、縁の遠いものゝ如くに考へたのは、天保時代の教育法であつたといふことを、私は斷言して居るものでございます、而して今日は其縁が如何にも近くなりましたが、併し日本の現況は、此の實際と學理とが極めて密接して居るかといふに、悲しい哉、歐米諸國に較べて見ると未だ満足と申されませぬ、思ふに此の距離が極く密接する程、其活動も充分に行はれて、其國の進歩の度合もトし得られ、従つて富力も是れに伴ふものであるといふことは、蓋し私の妄斷ではない、臨場の學者諸君も此の言を變へることはお出来なさるまいと思ひます、果して然らば私共が、今夕斯様に兩者を接近する企をしたことは、決して奇異なる催しではなくて、

學問ほど俗人に必要

四一七

學問の俗人に必要なる所以

四二八

勿論相當なる事であつて、何故是れまでに斯々斯ういふ御會合を願うて、學理に就て我々は斯う考へる、實際に於ては吾々は斯く企望する、又吾々は將來養成する學生には斯ういふ思想、斯ういふ人格、斯ういふ才能を持たせたいと注文もし、教示を受けるといふことをせなんだかと、

私は却て其遲きを憾む

のでございます、併し今夕幸にお打揃うて尊臨を請ひ、且つ大臣及び其他の諸君から教育に關することに就いて、吾々に御指導的のお話をも承り得らるゝことを思ひますれば、遅いとは申しながら前途

遼遠の吾々の社會に大に公益を増すことであらうと、洵に悦ばしい次第でございます、茲に一同に代りまして大臣其他の諸君にお禮を申し上げます。

余が實驗上得たる交際秘訣

交際の巧拙は人間立身の分水嶺なり

夫れ交際の巧拙が一身に取つて非常な關係を有することは論を俟たぬ、處で社會には言ふまでもなく交際術が必要である。交際術といへば、如何にも適當か何かの形で、思ひ是無うして身之れを行ひ、心之れ無うして口之れを言ふかのやうにも聞ゆるが、決してさうでない、

交際の巧拙は人間立身の分水嶺なり

四二九

余が實驗上得たる交際秘訣
四二〇
同じ意志を持つて居ても、穩かに、靜かに、さうして、圓滑に之を言ふのと、烈しく、突飛に、さうして、不躑に之れを言ふのとは、聽者に取つて如何なる相違があらうか、石垣の磊々たる目は漆喰の接ぎを待つて始めて優美に安全に其用を果すではないか、意思は恰も石塊の如くで、漆喰の表情術を待て始めてよく遺憾なく、愉快に發表せらるゝのである。其塗り方の巧拙は意思發表の完不完で、直ちに交際の巧拙を意味する、さうして交際の巧拙は應て人間立身出世の分水嶺ともなるので、決して忽諸にすべきでない。

人をソラさぬが肝腎である

處世上斯の如き重要な交際術は、サテ如何なる條件を要するかといふに、平日の修養持前によつて各々異なるものであつて、一概には言ひ難い所もあらうが、成る丈け人をソラさず、對手の長所を捉へてその氣を迎ふるも交際術の一たるを失ふまい。愛嬌タツプリ、忌味なく、怒らず、逆はず、相槌打つのも、悪くはあるまい。禮儀を守つて風采を正しくし、優しく麗はしく對應するのも決して不可ではなからう、又機轉を利かせてキハドイ所で人の度胸を抜いたり、機先を制したり或は機に應じて快感を與へたりするものも、其一法であらう、甚だしきは、『君は今日彼の件に就て來たのであらう。支那問題の成行に就て予が所見を叩く意であらう。君はそれに就いて、予が經濟上の意人をソラさぬが肝腎である』

余が實驗上得たる交際秘訣
見を聞き度いといふのであらう」と、斯う云ふ調子に、相手の度胸を
見抜いて談話をするやり方もある。

四三

誠心誠意を以てせよ

交際の要件は以上の如くで、種々雑多あるには相違ないが、これは
只形式上のことで、一般的にはどうしても人に接近するに誰れ彼れの
差別なく、精神を籠めなければ駄目である、自分が表情をゾツコン打
ち出してやらねば何うしても駄目である。表情を打ち出すといふこと
は取りも直さず、誠心誠意をさらけ出すことで、此の心懸が無ければ
什麼な表情術をやらうと、什麼な交際術をやらうと、それは只一の芝

誠心誠意
がもと

芝居をす
るな

居的で、相手に眞底から愉快を感じしむることが出来ない、誠心誠意
眞實に己れの精神を出せば、それは不思議なもので、自然の電気作用
とでもいほうか、非常な感應を相手に與へるもので、此の心底を以て
交際すれば殆んど交際術の必要もなくなるのである、要するに自分の
智慧の分量は急に少くならぬ代りに、又急に多くなるものでないから
怒に色んな芝居的のことはせぬがよい、若し人に對して、厭な感じを起
した場合には、明白にそれと表白するがよい、若し或説が相容れざる
場合にはドコまでも議論を試みるがよい、然し議論が合はざるとして
も、決して喧嘩するには及ばぬ、説の合はざるは只説の合はざるまで
で人物に於て何等の係りもない、説の相合はざるを以て罵詈するは、

誠心誠意を以てせよ

四三

君子の取らざる所で要は衷情を吐露して誠を盡すべきのみである。私
は是を以て交際の秘訣と心得て居るものである。

嘘詐は世に存在を許さぬ

また、人と對話する時に、對手に何か事をしながら應對さるゝ程不
快なことはない。私が嘗て大藏省の役人時代に之れを行つて、人に
怒られたことがある。此の時代は私が最も生意氣な、好く言へば元
氣旺盛な時代であつたので、五官を各自に働かすことが出来ると思ひ、
是を一生懸命に勤めたのである。或日のことであつた、井上勝さんに
一體話を眞面目に聞いて居るのかどうかと言はれて、怒られたことが

ある、で、其聞き取つた話を其通りに話し返すと、成る程聞いて居つ
たのだと言はれたことがあるが、是も一時で、仕事しながら話すなど
は人間には、出来ぬ事である。縦令出来ても實は入らぬもので、人に
對して悪感と與ふるばかりではなく、甚だ以て失禮な話である。であ
るから人と應對するには、是非とも衷情を吐露して他意なきが肝要で
これ以上には殆んど何物の必要もなからう。「誠者天之道也、誠之人
之道也」で、何事を爲すにも誠なければ駄目である。ソコで如何すれ
ば交際を圓滑にすることが出来るかといふ問題は、轉じて、如何すれ
ば誠を養ひ、如何すれば誠を發表することが出来るかといふ問題にな
る、誠の修養は教育によるもよし、又宗教によるもよし、私は始終孔

孟の教に依つて、己れの道徳を磨き、誠の道を修めて居るのである。哲學上孔孟位誠の道に就て説明してあるものはあるまい。「大學之道、在明明徳、在於親民、在止於至善」或は「富貴是人所欲也、不以其道得之、不處也、貧與賤、是人之所惡也、不以其道得之、不去也」何んと是等は見事な教ではないか、私は宗教心が乏しく、洋學に詳しからぬので、他を斥くる譯には行かぬが、ソクラテースの如きも十分の説明はないかと思ふ、然し孔孟の教は甚だ勢力がなく、宗教とても左程振はず、充分に誠の道を教へることが仲々六かしくなつた、斯うなる上は、願くは社會の制裁に訴へ、言はゞ強制的に、誠によらずんば、到底世に處することが出来ぬのである。嘘詐は世に存在を許さぬ、

イヤでもオウでも正直に働かねばならぬと教へたら習性となるので、何時かは眞に人々が誠を會得するやうにもならう。望むべきは社會の制裁である。

悲觀と樂觀

極端なる二個の思潮

日本も維新以降萬般の事物に長足の進歩を示し、此の四十年間ばかりに文明の程度が他の先進國に一步も譲らぬまでになつたのは、世界各國に比して類例なき發達と謂はなければならぬ。然るに斯の如く世の中が進歩し、人智が發達して行きつゝあるにも拘らず、其處には人

悲觀と樂觀

情として色々なる思想も起り、物事に對するに形の一方に偏して考へるものと實の一方に偏して考へるものとの二つを生ずるに至つた。余は此の二者の偏見が即ち悲觀と樂觀との依つて岐ると所であらうと思ふ。例へば形に偏して考へる樂觀論者は、教育が進歩したと云つては何でも教育でなければならぬ様に云ひ、豆腐屋、魚屋、人力車夫の輩に至るまで新聞や雑誌の讀めるといふのは、一に教育普及の恩恵に因るものであるというて喜ぶ。さうかと思ふと、又實にのみ偏して考へる悲觀論者は、教育の盛になることが社會を賊ふかの様に云ひなし、教育發達の結果、餘り秀才でもない者までが、わいゝ騒ぎ立て、自家の本業たる農業を抛つて學問に向ふので、幸に學校だけは卒業が出

來ても、早速これといふ職業にも有り付かれず、爲すこともなく日を送つて居る。詰り學問を修めた爲めに、却て用途の無い人となつて仕舞ふ譯で、そんな者が世の中に段々増加すれば、遂に一村一町を亡ぼし、延いては國家の大事に到らぬとも限らぬと謂うて、教育の隆盛を忌むべき事柄の様にして、彼れ此れと論ずる。此等の議論を聞くと二者孰れも一通りの道理を含蓄して居る様に受取られ、果して何れに與すべきかに迷はざるを得ない。

悲觀樂觀の實例

更に經濟に關する一例を擧ぐれば、樂觀論者は近來の現象を以て國

家の慶事となし、それに就いて都合よき説を立て、近頃は非常に金融が緩漫になつたが、昔は利子が一割とか、小額の貸借は二割といふ法外のものもあつた、それに金の融通も現今の如く手軽にはゆかなかつた。然るに今日では文明の度が進んだ御蔭に、財政經濟の事も遺憾なく攻究されて、銀行の如き金融機關が出来た爲に利率も大に下つた。そして公債などは年四分といふ極めて安い利率で、海外に於てすらこれが借換へをすることを得るやうになつた。一體金利は英國が一番安い、これは文明の程度が高いからで、文明の程度が高い所は、それだけ諸種の設備や機關が整うて居るから、従つて金融の道も完備し、利率も安くなつて行くのである。と斯ういふ議論を立て、現今の經濟

状態が金融緩漫で利率の安くなつたのは、畢竟それだけ我が國の文明が進歩して來たのだ。金融機關が発達して來たのであると謂つて一概に樂觀して居る。

然るに悲觀者側の言を聞けば、日露戦後人氣の昂騰に乗じて諸種の會社事業の創立を見たが、越えて四十年には早くもそれ等の事業に續々として倒るゝものが出來た。爾來事業界は意氣銷沈して、復手を伸ばし得るもの無きに到つたが、此の秋に方つて、而も當局者は政府萬能主義を振廻し、鐵道を國有とし、煙草、鹽等の專賣を敢行したので、經濟界の仕事には、殆ど、これと競争するものが無い程になつた。加之、政府は續々國債を募集し、戦後に於ける財政の整理にこれを用ひ

て居る。思ふに政府の負債を償還するばかりが當局者の取るべき道でもあるまい。國民が負擔に苦しみつゝある非常特別税の如きは減じ得らるゝ限り減じてやり、民間事業も出来るだけは勃興させ發達する様に心配してやるのが本分ではないか。否、義務ではないか。所が前述の如き遣り方であつて見れば、現今金融の緩慢であるのも、利率の安いのも、金融機關が眞に進歩發達を遂げた爲ではなく、全くは金の居どころが一方に偏して居る爲に、一般事業が萎靡して振はぬやうになり、手が出せぬやうになつたから、それで割合に遊金が多く、従つて利率も安くなつたのである。それ故日本の經濟界のことを英國などに比較して論ずることは間違である。と斯ういふのが悲観論者の説である。

る。而して此の兩者の説も亦一應尤も千萬で、理窟は孰れにも有るらしく見えるが、結局二者共に偏見たるを失はないと思ふ。

何が故に達観せざる

要するに余は孰れにも全然これに同意することが出来ない。何故ならば既に言つた様に悲観、樂觀の二者孰れも見方が一方に偏し、兩極端に走つて居るからである。一方に偏したのは即ち正鵠を得たものでなく、また所謂達観の境地に達したるものとも謂はれない。凡そ何事に依らず、達観したならば悲観も樂觀も起るべき道理はない筈である。されば達観とは何を指していふか。余は中庸を得た觀察が即ちそ

達観とは何ぞ

何が故に達観せざる

れであらうと思ふ。偏せず、黨せざる所に眞理が含まれて居るのであるから、其の言行が正鵠を得るならば、それは中庸を得た人、達観した人と稱することが出来よう。併し乍ら此の中庸といふことが中々得られ難いものである。朱子は「偏せざるを之中と謂ひ、易らざるを中庸といふ。中は天下の正道、庸は天下の定理」と説いたが、中庸の本旨はそれに相違ない。また子思は「中庸」に「喜怒哀樂の發せざる之を中と謂ひ、發して皆節に中る之を和と謂ふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり」というて中の字に解釋を與へて居るが、中和を得ることが出来れば、世の中のことには必ず圓滑にやれる譯である。更に孔子は「君子は中庸す小人は中庸に反す」と述べて、中庸は君子の

道であると教へた。兎に角何に依らず、偏するといふことはいけな
い。悲観樂觀を超越した所に自ら行く可き道はある筈である。故に余
は常に一方に偏せず極端に走らず。よく其の中間を取つて案排してゆ
くやうにしたいと思ふから、嘗て悲観も樂觀もしたことがない。悲観
も樂觀も無いといへば誠に人生が無味乾燥であるらしく聞えるが、決
して左様いふ譯ではない。中庸を得た所に一道の行路を求め程愉快
なものはない。近頃の人は動もすれば忽にして悲観し又忽ちにして樂
観する。今は悲観樂觀さへ一種の流行語となつて居る位であるが、こ
れは如何にも精神的修養の疎かにされて居ることを表面に告白する様
なもので、甚だ感服の出来ぬ現象ではあるまいか。少々せうくの齟齬撞着に

依つて悲觀したり、僅少の得意會心に依つて樂觀したりして居ては、日常生活が恐らくうるさいものになつて仕舞ふであらう。余は他人が餘り悲觀したり樂觀したりするのを見る毎に『何故あの人は達觀してより以上安心の生涯に入るとをせぬだらうか』と、寧ろ夫が不思議に思はれる位だ。即ち余の立場は悲觀も樂觀もせぬ處にあるのである。

逆境處世法

順逆は人自ら造る境遇なり

世人は順境逆境といふことを通り言葉の如く云ふが、若し世が順調に行き、政治正しく行はれ、何事も平穩無事ならば、順境とか逆

順境
は人によ
りて作ら
る

境とかいふ場合は稀であらなければならぬ。時には運不運に因つて順境にも立ち逆境にも陥る人が無いとは言はれぬけれど、多くは其の人の勉強が足らず、智慧が足らぬ所から逆境を招致し、それと反對の智慧もあり、事物に考慮が深く、場合に適應した行り方をする人が順境に立つは自然の理である。して見れば特別に順境とか逆境とか云ふものが此の世の中に存在して居るのではなく、寧ろ人の賢不肖、才不能に因つて、殊更に順逆の二境が造り出されると見て差支ない。然り矣、余は實に爾か信する者であつて、順境といひ、逆境といふも、總て人々の心掛に因つて造りなされるものであるとして見れば、天の爲せることの如くこれを稱して順境である。逆境であるとは云へぬ筈で

順逆は人自ら造る境遇なり

ある。故に一言にして順逆といふとも、其の順境となり逆境となつた所以を究め、此の者はこれの理由で逆境に居るが、彼の人云々の原因で順境に居るといふ場合を克く判断せぬと、これに處するの道如何をも根柢から論ぜられぬ譯である。

順境を作る人逆境を作る人

然らば人は如何にして順逆の二境をつくるであらうか。余は今二つの例を引いてこれを説明しようと思ふ。

茲に二人があるとして、其の一人は地位もなければ富もなく、素よりこれを引き立てる先輩もない。即ち世に立つて榮達すべき素因とい

自ら順境
を作る
人

ふものが極めて薄弱であるが、纔に世の中に立つに足るだけ、一通りの學問はして世に出たとする。然るに其の人に非凡の能力があつて、身體が健康で如何にも勉強家で、行が皆節に中り、何事をやらせても先輩をして安心させるだけに仕上げるのみならず、却て其の長上の意思意外に出る程にやるなら、必ず多數人は此の人の行ふ所を賞讃するに相違ない。而して其の人は官に在ると野に在るとを問はず、必ず言行はれ、業成り、遂には富貴榮達を得らるゝやうになる。しかるに此の人の身分地位を側面から見居る世人は、一も二も無く彼を順境の人と思ふであらうが、實は順境でも逆境でもなく、其人自らの力で左様いふ境遇をつくり出したに過ぎぬのである。

順境を作る人 逆境を作る人

自ら逆境
を作り出
す人

逆境處世法

四四〇

更に他の一人は、性來懶惰で、學校時代には落第ばかりして居たのを、やうくお情けで卒業したか、さて此の上は今まで學んだ所の學問で世に立たねばならぬ。けれども性質が愚鈍で且つ不勉強であるから、職を得ても上役から命ぜらるゝ所の事が何も彼も思ふ様に出来な
い。心中には不平が起つて仕事に忠實を缺く、上役に受けが悪く遂に免職される。家に歸れば父母兄弟には疎んぜらるゝ。家庭に信用が無い位なら郷里にも不信用となる。斯うなれば不平は益々嵩まり、自暴自棄に陥る。其處に附け込んで悪友が誘惑すると思はず邪路に踏み入り、勢ひ正道を以て世に立てぬことになるから、已むを得ず窮途に彷徨しなければならぬ。然るに世人はこれを見て逆境の人といひ、又そ

れが如何にも逆境であるらしく見えるのであるが、實は左様でなくて、皆自らが招いた所の境遇であるのだ。韓退之が其の子を勵ました『符讀書城南』の詩中に、『木就規矩、在梓匠輪輿、人之能爲人、由腹有詩書、勤乃有、不勤腹空虚、欲知學之力、賢愚同一初、由其不能學、所入遂異、兩家各生子、提孩巧相如、少長聚嬉戲、不殊同隊魚、年至十二三、頭角稍相疎、二十漸乖張、清溝映汗渠、三十骨體成、乃一猪一龍、飛黃騰踏去、不能顧蟾蜍、一爲馬前卒、鞭背生虫蛆、一爲公與相、譚々府中君、問之何因爾、學與不學歟、云々』といふ句があるが、こは主として學問を勉強することに就いて曰うたものであるとは云へ、又以て順逆二境の由つて別るゝ所以を知るに足

順境を作る人 逆境を作る人

四四一

るであらう。要するに悪者は教ふるとも仕方なく、善者は教へずとも自ら仕方を知つて居て、自然と其の運命を作り出すものである。故に嚴正の意味より論ずれば、此の世の中には順境も逆境も無いといふことになる。

順逆兩境は人爲的なり

若し其の人に優れた知能があり、これに加ふるに缺くる所なき勉強をしてゆけば、決して逆境に居る筈がない。逆境がなければ順境といふ言葉も消滅する。自ら進んで逆境といふ結果を作る人があるから、それに對して順境なぞといふ言葉も起つて來るのである。例へば身體

の脆弱の人が、氣候を罪して、寒いから風を引いたとか、陽氣に中つて腹痛がするとかいうて、自分の體質の悪いとは更に口にしない、これも風邪や腹痛といふ結果の前に、身體さへ強壯にして置いたならば、何もそれ等の氣候の爲に病魔に襲はるゝとは無いであらうに、平素の注意を怠るが爲に、自ら病氣を招くのである。然るに病氣になつたからというてそれを自分の責とはせず、却て氣候を怨むに至つては、自ら作つた逆境の罪を天に歸すると同一論法である。孟子が梁の恵王に『王歳を罪すること無くば、斯に天下の民至らん』と曰うたのも矢張同じ意味で、政治の悪いことを云はず、歳の悪いことに其の罪を歸せしめんとした誤である。若し民の歸服せんことを欲するならば、

順逆兩境は人爲的なり

歳の豊凶は敢て與る所に非ず、専ら治者の徳の如何を主とせなければならぬ。然るに民が服せぬからというて、罪を凶歳に歸して自己の徳の足らざるを忘れて居るのは、恰も自ら逆境を作りながら、其の罪を天に問はんとすると同一義である。兎に角世人の多くは、我が智能や勤勉を外にして逆境が來たかの如く云ふの弊があるが、其は愚も甚だしいもので、余は相當なる智能に加ふるに勉強を以てすれば、世人の所謂逆境などは決して來らぬものと信するのである。

眞意義の逆境

以上述べた所よりすれば、逆境はないものであると、絶對に言ひ切

り度いのであるが、左様まで極端に言ひ切れない場合がある。それは智能才幹何一つの缺點なく、勤勉精勵、人の師表と仰ぐに足るだけの人物でも、政治界實業界に順當に志の行はれて行くものと、其の反對に何事も意と反して蹉跌する者とがある。而して後者の如き者に対して、余は眞意義の逆境なる言葉を用ひ度いのである。これを前に論じたやうな種類の、逆境といふけれども實は其人自ら作り成した境遇と、今余が論ずる如く人物行動に缺點なくとも、社會の風潮、周圍の境遇に依つて自然と逆境に立たねばならなくせられたのと比較すれば、其の差は如何であらうか、前者の如きはそんな境遇に陥らぬ様にしようとするれば其の人の心掛一つでどうにでもなる性質のものだが、

逆境處世法

後者はそれと同一に視る譯にはゆかない。假令自分は如何様に思へばとて、社會の風潮、周圍の事情がこれを逆の方面に運んでゆくからには、或る意味に於て人間力の及ばぬ點がある。即ち天命に依つて然る所以であると覺悟しなければならぬ。斯の如き場合に處した人にして始めて逆境に處するの心得が必要である。故に余は此の意義に於て逆境處世法を説かんとするのである。

余も逆境に處して來た一人である

これに先だちて、眞の逆境とは如何なる場合をいふか、實例に徴して一應の説明を試みたいと思ふ。凡そ世の中は順調を保つて平穩無事に

ゆくのが普通であるべき筈ではあるが、水に波動のある如く、空中に風の起るが如く、平靜なる國家社會からも時として革命とか、變亂とかいふことが起つて來ないとも斷言されない。而して之を平穩無事な時に比すれば明かに逆ではあるが、人も斯の如き變亂の時代に生れ合ひ、心ならずも其の渦中に巻き込まれるは不幸の者で、斯ういふのが眞に逆境に立つといふのではあるまいか。果して然らば余も亦逆境に處して來た一人である。余は維新前後の世の中が最も騒々しかった時代に生れ合ひ、様々の變化に遭遇して今日に及んだ。顧みるに維新の際に於けるが如き世の變化に際しては、如何に智能あるものでも、又勉強家でも、意外な逆境に立つたり、或は順境に向つたりしないとは

余も逆境に處して來た一人である

言はれない。現に余は最初尊王討幕、攘夷鎖港を論じて東西に奔走して居たものであつたが、後には一橋家の家來となり、幕府の臣下となり、それより民部公子に隨行して佛國に渡航したのであるが、歸朝して見れば幕府は亡びて世は王政に變つて居た。此の間の變化の如き、或は自分に智能の足らぬことは有つたであらうが、勉強の點に就いては自己の力一杯にやつた積りで不足はなかつたと思ふ。併し乍ら社會の遷轉、政體の革新に遇うてはこれを如何ともする能はず、余は實に逆境の人となつて仕舞つたのである。其の頃逆境に居つて最も困難したことは今も尙記憶して居る。當時困難した者は余一人だけでなく、相當な人才中に余と境遇を同じうした者は澤山あつたに相違ないが、斯

の如きは畢竟大變化に際して免れ難い結果であらう。但しこんな大波瀾は少いとしても、時代の推移に連れて常に人生に小波瀾あることは已むを得ない。従つて其の渦中に投ぜられて逆境に立つ人も常にあることであらうから、世の中に逆境は絶対に無いと言ひ切ることは出来ないものである。只順逆の差別を立つる人は、宜しく其の因つて來る所以を攻究し、それが人爲的逆境であるか、但しは自然的逆境であるかを區別し、然る後これに應ずるの策を立てねばならぬ。

逆境に處する心得

さて逆境に立つた場合は如何に其間に處すべきか、神ならぬ身の余

は別にそれに對する特別の秘訣を持つものではない。又恐らく社會にも左様な秘訣を知つた人は無からうと思ふ。併し乍ら余が逆境に立つた時自ら實驗した所、及び道理上から考へて見るに、若し何人でも自然的逆境に立つた場合には、第一に其の場合を自己の本分であると覺悟するが唯一の策であらうと思ふ。足るを知りて分を守り、これは如何に焦慮すればとて天命であるから仕方がないとあきらめるならば、如何に處し難き逆境に居ても、心は平らかなることを得るに相違ない。然るに若し此の場合を總て人爲的に解釋し、人間の力で如何にかなるものと考へるならば、徒らに苦勞の種を増すばかりか、勞して功のない結果となり、遂には逆境に疲れさせられて、後日の策を講

天命に安んぜよ

ずることすらも出来なくなつて仕舞ふであらう。故に自然的の逆境に處するに方つては、先づ天命に安んじ、徐ろに來るべき運命を待ちつつ撓まず屈せず勉強するがよい。

それに反して人爲的逆境に陥つた場合には如何にすべきかといふに、人爲的から逆境を招くのは多く他働的でなく自働的であることは、彼の二學生の例に依つて釋然たる所であるから、何でも自分に省みて悪い點を改めるより外に道はない、前にも述べた通り、世の中のことは多く自働的のもので、自分から斯うしたい、あつ仕度いと奮勵すれば、大概は其の意のまよになるものである。然るに多くの人は自ら幸福なる運命を招かうとはせず、却て手前の方から殆ど故意に倭け

逆境に處する心得

大正八年十一月廿三日印刷
大正八年十一月廿五日發行

處世訓終

逆境處世法

逆境處世法
 人となつて逆境を招く様なことを爲して仕舞ふ。それでは順境に立ち度い、幸福な生涯を送り度いとて、夫を得られる筈が無いではないか、故に己より生じて遂に逆境に立たねばならぬ運命を餘儀なくされたといふ場合なら、先づ自分に就いて悪い點を直す、又天命と自覺したら、其の事を處して完全の道理を盡すといふより外に逆境に對する道はあるまいと思ふ。

四五三

袖珍名家文庫 第六 處世訓

正價金壹圓五拾錢

不許
複製

著作者 澁澤榮一
 編者 野中春洋
 發行者 東京市牛込區神樂町一丁目一番地 東亞堂
 代表者 專務取締役 木村定次郎
 印刷者 東京市本所區番場町四番地 今井扶
 印刷所 東京市本所區番場町四番地 出版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市牛込區神樂町一ノ一

電話番町五三七
振替東京一七一

株式會社 東亞堂

陸軍中將 堀内文次郎閣下著 —— (袖珍名家文庫 第一) ——

先づ腹を鍊れ

洋装極美本
四百十頁
正價壹圓卅錢
送費金六錢

堀内閣下は過ぐる青島戰の勇將也、將軍今や功成り名遂けて専ら心を禪に潛め造詣する所頗る大なり、本書は將軍の所在に講演し筆録せられたる名論卓説を一括せるもの、蓋し現代青年の修養書として引く一般に獎むべきもの也左に其要目を摘記す。

要	禪機と軍機と商機	時局と國民の覺悟
目	殺道人の活人劍	健全なる精神
	古武士の禪機	日本魂と禪
	殺活自在の妙機	禪將奇談
		戰爭禪(其他數章)

日南福本誠先生著 —— (袖珍名家文庫 第二) ——

縮刷英雄論

洋装極美本
六百九十頁
正價壹圓八十錢
送費八錢

日南先生の三部作英雄論、黒田如水、直江山城守を縮刷合本したるが本書なり、此の三書は先生の作中最も苦心經營に成り、文章雄大史實正確、夙に天下の評判となりしもの、久しく絶版の儘なりしを此度讀者諸君の要請に従つて、新装の下に再び市に上すことよせり、即ち英雄論に於ては英雄の主義に筆を起し、其風采、本領、襟度、性癖にまで及ぼし、如水傳は六十餘章に分たれ、兼續は傳と論との外に附録として石田三成を品隋せる一文など著者一流の筆致何人も首肯せしめむ。

安田善次郎翁著 — (袖珍名家文庫 第三) —

金の世の中

洋装一極美本
三百八十八頁
正價壹圓廿錢
送費六錢

曩に英國倫敦に於ける内外情勢研究會は、遙かに一書を安田翁に送り來り、翁が如何にして其特有の勤儉貯蓄の美風を一般青年者間に弘通するかにつきて諮問せり、蓋し倫敦の該研究會は、日英兩國をして徹底せる理解の下に、同盟の意義を厚うし、兩國民の親善を増進する目的の下に活動せるものにして、安田翁の所説は倫敦に於て近く出版せらるゝこととなれり、即ち本書は英譯の原本に數種の所説を加へて一冊子とせるもの、以て其價值を知るべき也。

伯爵大隈重信閣下著 — (袖珍名家文庫 第四) —

青年の爲に

洋装一極美本
三百五十八頁
正價壹圓貳拾錢
送費六錢

候爵大隈重信閣下は、現代の日本が有する國寶的の大偉人也、閣下夙に維新の大業に盡し、政府の主班に列すること數次、常に獨特の熱辯を揮つて國民を指導し啓發し、鞭撻し、老來益健を加へて舌端火を吐くの概あり、本書は閣下の世道人心に薰化を與へし數十篇の卓説を選び、主として青年の讀物たらしむべく編纂せり、希くは再讀三讀して刻下の時流を超越せられよ。

刊目次

男爵後藤新平閣下著	5	自治の修養
男爵澁澤榮一閣下著	6	處世の修養
加藤咄堂先生著	7	縮刷運命論
尾崎行雄先生著	8	永遠の平和
巖谷小波先生著	9	我が五十年訓
法學博士添田壽一先生著	10	國民經濟訓
醫學博士高木兼寛先生著	11	身心強健法

分類書目

縮刷 改版 増補 縮刷 立 道は 成功 刷處 修 心	養力論 養論 功論 時機 講話 訓 練	縮修 縮修 論語 陽明主義 急がば 皇國の 生きる 道	縮修 縮修 論語 陽明主義 急がば 皇國の 生きる 道	人物と事業 科學 一般佛敎 信は力なり 修養と信仰 修養の極致 信念の發揮 我が日蓮主義 縮向 上 論
---	---------------------------------------	--	--	---

一 教育哲學一
 桃太郎主義の教育
 哲學五流辨及其他
 奮闘哲學
 一 禪學一
 禪の妙味
 禪學眞髓
 禪の活路
 禪の活用
 禪心録
 無一物處
 禪學新論
 機略縱橫
 箇中の樂地
 禪機世機
 一 歷史傳記一
 男の中の男
 歴史の教訓
 英雄と修養
 讀史の趣味
 一 隨筆一
 出たらめの記
 人間と自然
 人生の裏面
 縮石白のへそ
 一家政一
 女らしく
 花より實をとれ
 無駄なき生活

文學博士 幸田露伴先生著

縮刷名著叢書第一編

再版 改版 縮刷 努力論

彩色 五百七十圖入
正價金壹圓三十四錢
送費金 八錢

努力して努力する、それは眞のよいものではない、努力を忘れて努力する、それが眞のよいものであるとは著者幸田博士の序文の一節である、蓋し本書は博士が多面なる半生の経験を基礎とし、該博の蘊蓄を傾倒して、人力と運命の關係から、如何にして自己を革新するかと云ふ點を述べ、幸福を招致すべき三大哲理と成敗利鈍禍福榮辱の因て來る原理を喝破したものの、版を改むること數回數十版十萬部を賣り盡して高評更に一層である。

運命と人力と	着手の處	自己の革新
惜福の説	分福の説	植福の説
努力の堆積	修學の四標	凡庸の資質
接物宜從厚	四季と一身と	疾病の説
靜光動光	進潮退潮	說氣山下語
附錄 王陽明の教訓		

加藤 咄堂 先生 著

縮刷名著叢書第二編

修養論

彩色 五十七頁
正價 一百八十錢
送料 八錢

修養の要義は己を知るにあり、自己の宇宙に於ける位置、人生に於ける任務を自覺し、此の自覺の根柢に立ちて世に處し道を行ひ、我生存をして意義あらしむ、これ吾等が修養の指針也とは著者の言、實際修養は一生の一大事である、本書は古今東西に亘つて、偉人先哲の立志奮勵して、人格鍛錬に努力した趣味深き逸話や史實を骨肉として、新らしき修養法を建設したもので、實に幸田博士の努力論と姉妹双璧をなせる名著である。

性善惡	知見と徳性	罪惡の起源
自由意志	個性の要素	修養の可成
理想と現實	國民の道徳	處世の修養論
修養の法	哲賢の言行	英雄の修養訓
其他數十章		

文學博士 前田 慧雲 先生 著

縮刷名著叢書第三編

信は力なり

彩色 九十二頁
正價 一百八十錢
送料 八錢

信は力なり、心を治むる力なり、身を修むる力なり、家を齊ふる力なり、天下を平にする力なり、語を換へて之を言へば、生死を超越するの力なり、倫理を實踐するの力なり、民心を調和するの力なり、殖産興業を振作するの力なり、又此力は敵軍を攻撃するに於ては機關砲よりも大なり、要塞を破壊するには、攻城砲よりも猛なりと、學徳兼備の博士の所説をきいて、各人よろしく大勇猛心を養ひ、以て濁世の波を踏破すべきにあらずや。

道具に負る勿れ	本を養へ	無邪氣なるべし
温古知新	雅懐を養へ	現在を樂め
體讀玩味	兩面の修養	食はずぎらひ
無盡の寶庫	知足安分	山林の樂
漸進主義	情的修養	説教を學べ
法界は皆道	其他數十章	

鷗崎鷺城先生著

縮刷名著叢書第四編

世當策士傳

五彩 八圓二角
正價 壹圓卅錢
送費 八圓卅錢

著者鷺城先生は、現代文界に於て、人物月旦のオーソリチーたるは、何人も首肯する所、本書は著者が最も得意とせる筆致を以て過去の人現在の人の中其策士と稱せらるゝもの數十人を拉し來りて、縦横に品臨したるもの、快筆天馬の空を驅するが如く、たゞに讀みて面白きのみならず、社會の半面を知り、自己の進み行くべき路も、明かにされたる觀あり、蓋し此書は鷺城先生が多數の人物月旦中にて、最も快心のものゝみを集録したる好著なり。

江川	藤新平	後藤象次郎	陸奥宗光
桂上	操六郎	荒尾巳代治	山縣有朋
清浦	奎吾	伊東大輔	原田龜太郎
岡本	柳之助	財界の策士	林田龜太郎
藝界の策士		其他數十章	醫界の策士

文學博士 幸田露伴先生著

縮刷名著叢書第五編

立志立功

彩色 八圓四角
正價 五圓
送費 八圓四角

現代の青年は一面人格の修養に力むると同時に、又一面に於ては大に科學的思想を發達せしめて、歐洲人に對抗しなければならぬ、すべての物資を自給自給して國富を圖らねばならぬ、此の書は幸田博士が架空の談話にかつて、深遠なる科學の原理を説き、發明の端緒を得せしめるやうに、懇切に説述せられたものであるから、現代に最も適切なる國民讀本であると云つてよい、試みに左の目次の一斑を見たいけれども、必ずや讀者に喜ばれるであらう。

ガード式の便利	飛行機の手捕	智慧がないなア
泥繪と要石	亞鉛精鍊	電力輸送
常盤燈	盜難保險會社	無益の發明
大空道	無機關車	瓜哇の邪長様
尊い性路	千羽飼	大供食會社
六分の一の力	其他數百章	

文學博士 前田慧雲先生著

縮刷名著叢書第六編

八 修養と信仰

正四兩 價百二十六
送費金八廿六 錢錢頁入

修養の極致は信仰に入るにあり、信仰なき人は沙上の樓閣にして、到底大事を擔當するに堪へず、先生の識と徳と、吾人を導きて三世の迷妄を打破し、理智冥合の大信仰地に到達せしむ、先生前に「信は力なり」の著あり、本書と併せて首尾一貫花實併せ得たり、讀者一度本書を手につけば、親しく膝を交へて先生の教化を蒙るが如く、一讀巻を措くに暇なかるべし、切に大方各位の熟讀を祈る

心 樂 我 落 付	宗 教 の 本 旨	佛 教 現 象 論
世 間 即 佛 法	無 限 絶 對	煩 惱 即 菩 提
死 に 就 て の 修 養	裸 行 上 人	觀 音 と 彌 陀
大 乘 圓 頓 戒	正 義 と 忠 孝	差 別 中 の 差 別
親 聖 人	其 他 數 百 章	源 信 和 尙

加藤咄堂 大住嘯風兩先生著

縮刷名著叢書第七編

四 常識の基礎

口 繪 挿 畫 引 入
詳 密 索 引
七 百 三 十 二 頁
正 價 壹 圓 四 十 錢
送 費 八 錢

現代に立脚し時代の智識に遅れざらんと欲せば、勢ひ當代學術の趨勢に鑑み、人類思想の默移を察し、其進捗の有様を知悉せざるべからず、時代の學術に盲に、明快なる判断を缺かば、いかてか常識ある行爲となすを得べき、即ち本書は此の缺を補はんが爲め加藤大住兩先生が泰西學術の新書によりて、宇宙界萬般の事象を列記闡明して、開明の世に處すべき人の羅針たらしむ、堂々八百頁の大冊、讀者の智識を肥すこと尠少なからざるべし。

宇 宙 の 始 元	太 陽 系 統	以 外 の 星 宿
月 球 の 發 達	地 球 の 發 達	地 球 の 過 去 現 在
生 物 の 由 來	動 植 物 界	自 然 と 人 類
人 類 の 發 達	肉 體 と 精 神	社 會 の 成 立
社 會 の 發 達	社 會 の 趨 勢	近 代 の 化 學
物 理 學 の 發 達	以 下 數 百 章	

大内青巒先生著

縮刷名著叢書第八編

道は近きにある

正四彩 價百十兩 送費壹圓廿八 錢錢頁入

青巒先生は學徳兼備の偉人、其説く所悉く世道人心を裨益せざるはなし、先生自ら撰む所の三信三行の條文に立脚して、新たに此著あり、卷頭序文の一節に曰く、故に謂ふ至道は難なく、洞然明白なりと、又謂ふ道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず、乃ち知る云爲動靜悉く是れ斯道の出沒なることか、迂更平常好ん此道を談ずと、本書は實にかくして成れるもの。先生の骨髓は收めて此一冊子に在りと云ふべし。

目要

道仁遠恭全
源義源
教報知三六
其他十數
本恩識業度章

忠報修博自

孝謝養愛覺

巖谷小波先生著

縮刷名著叢書第九編

桃太郎主義の教育

正三彩 價百十兩 送費壹圓廿八 錢錢頁入

小波先生の少年教育に従事せらるゝや久し、此書は日本人が有する唯一の傳説的快男兒たる桃太郎を假り來つて、其純美の性格を稱へ、酒々數十章筆陣堂々、誤れる教育界に一大鐵槌を下せるもの、獨り教育家のみならず社會全般に波及して、其影響する所頗る大なるものあらん、あゝ我日本の有する唯一の小波先生は、こゝに此書を出して、積年のお伽研究にはじめて意義を生ぜるものと言ふべし、宜なる哉本書の出版以來各學校家庭より甚大の賞讃を博したることや。

目要

新店の發展
えらぬ同人物
頼まぬ同盟
滋養的教訓
日養本教一
公平と雅量

大切な試験
生垣の必要
獨立心の妙
無造作の失敗
遠慮の十章
其他十數

迂濶な教育
十人十色
なかれ主義
満腹主義
直情徑行

文學博士 村上專精先生著 縮刷名著叢書第十編

成功の時機

函入 三頁 正價 百九十八圓 送費 壹圓 廿四錢

人の成功は萬事二十年を要するとは、村上先生の持論なり、由來現代の青年は、兎角成功を急ぎ、衣食の資を求めんとするに汲々たり、然れども眞の成功は決して急ぐものにあらず、急げば必ず失敗を招く、事功は急がずして忠實に今日を勤むる者には期せずして求むるを得べし、本書は萬事二十年の所論に立脚して、古來歴史上に著聞する英雄高僧に例を求め引證博大、立論堂々、讀者をして成る程と首肯せしむ、成功を希ふの人士は、速に就いて見られよ。

立志の目的	成功は志願成就	過去の經驗
身體の成長期	個人的成業	明治の發展史
古人の實例	秀吉成功の三期	家康の成功
戰國概観	曾我兄弟	輦山の功
臨濟禪師	兀菴和尚	佛光山國師
大光國師	其他數十章	

忽滑谷快天先生著 縮刷名著叢書第十一編

禪の妙味 附參禪道話

函入 四頁 正價 百二十八圓 送費 壹圓 廿二錢

それ禪の妙法は、之を日常實際の坐臥行住に應用するにあり、枯木寒巖、三冬暖氣なきが如きは是れ鬼窟裏の死禪のみ、快天先生の本書「禪の妙味」には活殺自在なる禪の玄機を解し、「參禪道話」には奇峭綿密なる古徳が見性の行履を示し、こゝに二書双輪の關係をなして、禪の體用と實學の工夫とを明かにせり、蓋し世間禪に關する書物の夥しき、汗牛充棟も當ならずと雖も、快天先生の本書の如きは、眞の禪を語るに足るべき好書として推賞するに足る。

禪の一字	禮養氣膽大病	妄想を除け
拘泥の病	養氣膽大病	澄心の方便
十牛の圖	觀理とは何ぞ	萬有一體觀
道とは何ぞや	無心の妙用	忘有の一觀
佛陀の模倣	精神の休養	放下八著
皆歸妙法	其他數十章	

大町桂月先生著

縮刷名著叢書第十二編

男の中の男

彩色四正 價百壹圓八錢 入頁

桂月先生序文の一節に曰く、あゝ男の中の男多き國は榮え、之なき國は衰へ、若くは亡ぶ、而して文明は往々文弱に伴ひて個人的となり、物質の奴隸となり、我利々々亡者となり、泣虫となり、所謂現代的となりて、男の中の男を失はんとす、余や男の中の男也、然れども其屑に甘ざる者に非ず、此の一書實にひさり男の中の男の英魂を吊ふのみならんやと、以て先生の抱負のある所を見るべし。

- 目 要
- 山中鹿之助 尼子大内對峙時代
 - 毛利織田對峙時代 尼子毛利對峙時代
 - 那須與一 惡源太義平 無官太夫教盛
 - 熊 曾我兄弟 阿新丸
 - 森蘭丸 楠正行 甲賀孫兵衛

加藤咄堂先生著

縮刷名著叢書第十三編

處世講話

彩色三正 價百六圓八錢 入頁

本書は著者が各地に於て講演せられたるものの中、主として、世に關するものを集め、以て通俗に人生の本義處世の要道を示されたるもの也、されば其記述は専ら通俗を期し、平易を旨とし、事の専門研究に渉るものは一切之を避け、具體的事實と平易の譬喩とを連れて婦女童蒙にも解し易からしむ、眞に此書の如きは、人世に習せんとする人士の、金科玉條とすべきもの、しかも著者の該博なる智識のひらめきは、所在に見えて光彩を添ふ。

- 目 要
- 處世と修養 修養の動機 處世と人情
 - 人性と人情 人情の美趣 親子の至情
 - 處世と至誠 誠は人の道 現實の生活
 - 花より團子 處世と希望 自由意志
 - 處世の福音 浮世の二面 世を渡る道
 - 三徳六度 其他數十章

理學博士 近重眞澄先生著

縮刷名著叢書第十四編

版五

禪學眞髓

函入美本
圖解 卅六錢
正價 壹圓
送費 八錢

近代哲學の根柢は、「自我の確立」にあり、禪の第一義は「自性の徹見」にあり、故あるかな近時思想界の覺醒に伴ひ、頓に禪學研究の氣運の勃興せることや、近重博士多年參究の學得底と、積年研讀の專攻智識とを傾け、露堂々、禪の眞面目を開發して、禪は宗教にあらずと斷じ、以て自家獨創の科學的解釋を完成せらる、眞に禪學の一大革新たり、既に平凡の禪書に飽けるの士は、宜しく此の新光明に接して、大なる獲得となすべき也。

三段論法	一段論法	哲學及科學
科學の價値	禪とは何ぞや	公案
坐禪	科學的批評	信心銘に就て
禪と學術	禪と人道	餘論
其他數十節		

矢野龍溪先生著

縮刷名著叢書第十五編

版四

出たためめの記附閑話集

彩色 五十頁
正價 壹圓二十錢
送費 八錢

龍溪先生は當代稀なる高士、而して先生の隨筆の如く多方面多趣味なるはあらず、道德、經濟、宗教、史論、詩歌、俳諧、俗談、俚諺、神曲、妖怪、滑稽、諷刺、ありとあらゆる材料を包括して、大は宇宙の洪遠より小は則ち日常の瑣事に及び、出たためめの記と閑話集と合せて無慮數百章、悉く金玉の文字ならざるはなし、兩書世上に跡を斷つこと久し、今や先生に請うて再訂増補し、合本縮刷して世に出づ、眞に近時隨筆漫錄の最上乘なるもの。

千野和	武聖	鳥士	俗左	射	字騎	町口	業黃	平鳥
夢紫	の	傳	大	阪	陣	必	銀	魚
心	地	蟻	蟻	桃	其他	數	節	

棚橋 絢子 刀自 著

縮刷名著叢書第十六編

女

ら し く

彩色 三頁 正 價 百六 費 金 八 壹十 錢 圓 頁入

「らしく」ぶらずとは、實に修養の金箴、男の男らしからざる、女の女らしからざる、共に睡すべし、棚橋先生、近時漸く女の女らしからざる者多きを憂ひ、其圓滿なる學と誠と徳を傾けて、本書を著さる、言々著實、さながら慈母の愛娘を鞠育するの概あり、天下の女學生、良妻賢母諸君、此一本を座有の寶典として、自己の修養訓たらしめ、併せて子女教養の好指針となさば、得る所實に計るべからざるものあらん。

目 要	
精神の持ち方	新婦人の修養
儒道の教育	孟子の言に鑑みよ
味のある教訓	動中に静なれ
姑と嫁の和合	一家圓滿の法
別居か同居か	勤勞の興味
家督相續	其他數十章
	女の世に出てし譯
	婦人の修養書
	自然を待つ
	家庭と品性
	家庭の禁物

新井 石 禪 先 生 著

縮刷名著叢書第十七編

向 上 の 一 路

四面 入 美 正 價 壹 圓 廿 錢 費 八 錢 頁本

人間の歩める道は頗る多し、されど一日も怠らず、一步も誤らず、常に精神の向上を念とせば、坦たる一道の眼前に展けるものありて、以て大に勇往し、邁進することを得べきもの也、新井石禪先生は禪林の大徳、言々句々悉く多年參究の餘瀝を集めて此の新著あり、以て世道人心に偉大なる薰化を與へ、現代青年の頭上に一大鐵錘を下す、取つて以て範とし、讀みて以て悟了すべきなり。

目 要	
正 語 行	退歩の工夫
修養の三心	廻天の力
孝順に至道	四種の雅行
禪は脚下にあり	禪の本領
身は心にあり	如愚を學せよ
當願衆生	其他數十章
	三相の修養
	含徳の修養
	佛敎の目的
	先づ靜坐せよ
	莫づ靜坐せよ
	曲

故塚原澁柿園先生著

縮刷名著叢書第十八編

三版 歴史の教訓

故きを温れて新しきを知るは、人間最良の智慧也、塚原先生は史界の飛將軍、今其半生讀書の所産たる最も感銘深き史上の挿話數十編を選び、附するに自己が維新の際に於ける萬死一生の實歴談を以てせるもの、其趣味津津たるは先生の從來の歴史小説にも過ぎ、其教訓に富めるは古來千古の哲學經典にも優る、今や先生世に亡し、此の書の如き又と得難き珍籍と稱すべし。

五十年前	經濟的生活	豊公と江戸
江戸語の變遷	新らしい女	一休禪師
任侠の意義	大石と古英雄	歴史と小説
倭寇	戦争のはじめに	選舉に就て
其他細目數十章		

彩色 四色 函六頁入
正價 百圓廿錢
送費 壹圓八錢

文學博士 前田慧雲先生著

縮刷名著叢書第十九編

三版 修養の極致

前田文學博士彙に「信は力なり」一編を出して、洛陽の紙價ために高し、本書は實に其姉妹編とも見るべきもの、基礎を絶對他力の信仰に置きて、縦横叙説し、或は古今幾多の例證を引き、或は先哲の學説を述べ、青年修養の人をして其奥堂に達せざんば已まざらんとす、蓋し高遠の理を平易の裡に解して、凡夫直入の信心を得せしむるは、眞宗の高徳先生の如きを以てはじめて之をなし得べき也。

十方觀と三世觀	十方觀	三世觀
餘説	德育偶談	處世の心得
佛教信仰論	宗教の信仰	信仰と處世
未來信仰と効果	佛教信仰の基礎	聖道門の信仰
他力淨土門の信仰	小智は菩提を要す	
附録(修養寶鑑)		

彩色 四色 函十頁入
正價 百圓廿六錢
送費 壹圓八錢

秋野孝道先生著

縮刷名著叢書第二十編

三版 禪の活用

送正四兩入美
價百〇二頁本
費壹圓廿錢

流るゝを本意の水も、一所に滞りて久しきに彌らば死水也、禪も之を世間に應用せざれば死禪のみ、世を避けて山に入らんは世上の人の事に非ず、店頭に坐しても田圃に耕しても銃劍を把りても之を善用すれば已に活ける禪なり、謂ふに禪の用途や廣く且大なり、退いて山林に死禪を學ばんよりは、進んで市井に活氣旺盛の人となれ、禪は人間活動の本源ならずや、孝道先生曹洞の禪風を講述して何人にも悟せしむ。

曹洞の禪風	道元の勝國	公案の題意
有相と無相	跳出の佛法	宗乘の自在
小自己全自己	法位と實際	人法の無礙
座中格外の理	轉生の活路	坐法の無礙
禪の皮肉骨髓	禪は十行持	不二の法門
禪心を養ふべし	其他十數章	

加藤咄堂先生著

縮刷名著叢書第廿一編

再版 英雄と修養

送正四彩
價百二十兩入
費金壹圓四錢

西郷南洲曰く、剛膽ならんを欲せば英雄のなせる迹を學べと、修養の秘訣は偉人英雄の先蹤を尋ねるより近きはなし、しかも英雄の事績の如何なる點を學ぶべきかは、實に甚だ理解し易からず、著者乃ち得意の筆を提げ、空海道眞、西行親鸞、重盛頼朝義經時宗日蓮正成一休謙信信長秀吉清正宗其他の諸英雄が、因て偉人たるに至りたる修養の道程を研究し、以て人格鍛錬の活模範を示さる、壯快無比の好書なり。

英雄とは何ぞ	心的生活	英雄と修養
英雄と歴史	神話的英傑	尚武の精神
思想の衝突	歴史と人生	平安朝の英雄
源平時代	鎌倉時代	南北朝時代
戦國時代	戦國一統時代	餘論
附録修養の模範其他		

横山健堂先生著

縮刷名著叢書第廿二編

三版 人物と事業

人物あるが故に事業あるか、事業あるが故に人物あるか、著者が燃犀の史眼、殊に行く所として可ならざるなき其該博の趣味は、絢爛花の如き詩筆と相俟つて、史上の快傑數十人を捉へ來り、人物によりて事業を論じ、事業によりて人物を評し、現代を論じ風尚を品し、逸話を評し傳説を究め、湧くが如き興味の間、世間人情の機微と歴史の哲理を暗示して、一讀人心を新たならしむ、近時出色の一大快文字也。

目要

江川坦菴	感化と影響	無名の小學教員
感化と躬行	徳川家康	人物と年始狀
櫻町陣屋の記	原 敬	金の治丸
カイヤセル	特派歐米大使	明川春浪
福井彦次郎	小野強に寄す	
大將乃木と赤穂義士	其他數章	

彩四色 價百圓 送正費 壹圓 八錢

二二

嘉悦孝子先生著

縮刷名著叢書第廿三編

三版 花より實を取れ

明治天皇も戊申詔書に於て華を去り實に就けし訓示し給へり、實を忘れて華に就き、理を離れて情に殉するは人の弱點、而も婦女子に於て殊に甚だしきを見る、嘉悦先生、近時滔々として虚榮に誤らるゝ者多きを憂ひ、修養の上より、家政の上より、社交の上より、經濟の上より、一々日常の實際問題に基き、人の人たる道を講じて、世人の迷妄を一掃し、叮嚀親切を極む、男女を問はず必ず一讀すべき名著なり。

目要

注意の話し	是の美風	極りよくせよ
古い女新しい女	菊もわが主義	婦人の娛樂
女學生の成功法	少い婦人に	商業教育
婦人と教育	若い婦人に	尊ぶべき尼さん
模範的婦人	理想の人物	主婦の訓練
時間の利用法	其他數十章	

彩四色 價百圓 送正費 壹圓 八錢

二三

大町桂月先生著

縮刷名著叢書第廿四編

再版 修養訓

彩色 二百二十頁
正價 壹圓八十錢
送費 八錢

雄大潤達苟くも局促の態なき者はそれ先生の文にあらずや、高踏超越些の俗塵を留めざる者は先生の人格にあらずや、此人格を以て、此文を生む、先生の修養訓の遙かに他の机上談議の類と選を異にせるは言を俟たず、本書は曩著中先生が深刻の経験より得られる人生に對する觀察録數百章を選びて成れるもの、天真なる先生の大人格は、隨所に讀む者を化せずんば已まざらんとす、男女を問はず即刻一讀あるべし。

人生は趣味也	感情と人生	日本國民の感情
徳育の覺悟	今俗史	運動と怪我
最後の覺悟	人性と職闘	日本の社會
無宗教の國民	健全なる常識	沙魚の會
道樂の趣味	草木十觀	杓子定の規
人格の感化	其他數百章	

文學博士 萩野由之先生著

縮刷名著叢書第廿五編

再版 讀史の趣味

彩色 一百零八頁
正價 壹圓廿八錢
送費 八錢

建國こゝに三千年、帝國の歴史は美なる哉、我國史界の泰斗萩野先生、多年研鑽の精蘊を集めてこゝに此の著あり、記す所即位の大禮や、宮中の御模様や、何れも國民必讀の好文ならねばなく、或は偉人談に或は傳説の研究に、或は史學研究録に紅紫爛漫として、宛然春の花野を遡ふに似たり、歴史の價值と趣味とを知らんと欲するの士は、悉く來りて先づ本書に就くべき也。

踐禱と即位	宮中の一日一夜	御落胤
武内宿禰の名	五月節句の教訓	佳話と虛傳
松下禪尼	斑田收授の沿革	儀式の三等
四度の公文	大字小字	朝參の時
草畫の休息	古の尺度	機物
草畫の休息	其他數十章	

大町桂月先生著

縮刷名著叢書第廿六編

人間と自然

出ては江山の間に傲嘯し、入つては史書を繙いて偉人を友とす、天地自然の大觀と、人間社會の觀察と、連れて兩界を一眸に集むるものは、それ我大町桂月先生の獨壇場にあらずや本書文は先生一流の神品、想は人寰を絶して宇宙造化の機微に參ず、されば讀者一度此書を手せば、坐して羽化登仙の客となり、更に古今の英雄と膝を交へて語るの快あらむ、天下好文の紳士淑女一日も坐右を去るべからざるの好冊子也。

目 要

嵯峨の二日遊羽雜感
 夏橋の海邊田園雜興
 宇治のよ守り淵
 汽車のよ中
 其他數十章
 金華山
 花春お
 絶命よ
 録り花譜山

彩色百二頁
正價壹圓廿錢
送費八錢

大内青巒先生著

縮刷名著叢書第廿七編

心の修練

奇しきは人の心なる哉、之を平かならしめんと欲すれば却て動き、之を靜かならしめんと欲すれば却て擾る、却初以來、古聖先賢の思を潜めし所も、實に心の修練に外ならず、大内青巒先生は我佛敎界の耆宿、今や七十四年の學得底を傾け來りて諄々として鍊心修爲の秘要を説き、漫語に家道に史談に人事界一切の世相に托して、心外無別法の妙諦を喝破せらる、心膽鍊磨の活文字、近時出色の好冊子也。

目 要

人心の歸向友を擇ぶ心得
 正直の徳禮儀がな
 善と惡と修養二則
 家庭と宗教佛敎と家庭
 再婚論に就て佛敎徒の孝行
 日本に就て其他十數章
 道を以て己を正す
 青年諸君
 修徳の基礎
 現代女子に望む
 母親は他人なるか

彩色百六頁
正價壹圓廿錢
送費八錢

理學博士 近重眞澄先生著

縮刷名著叢書第廿八編

再版

禪

心

録

彩色函入 挿畫多數
正三百八十六頁
送價金 八壹圓錢

禪學論や參禪録や禪學眞髓の著者として、高評ある著者の學窓雜感たる本書が、如何に異数の奇書たるかは、先生が化學者にして而も此の種の著あるに對しても之を察し得べし、讀者は先生の前著によりて、必ずや其妙想妙文に酔はされたるべく、本書は彼の禪學眞髓の姉妹篇として、出版早々重版の好況に接す、蓋し近重先生が近來の大獅子吼に接せんと欲するの士は、須く本書に就かざるべからず。

不可説の禪	禪の修行法	南禪と北禪
禪の境界	禪の位置	禪の活用
小乗教と禪	禪と人物	參禪の動機
研究の内面觀	快骨論	神速歩行術
青山の一角	關山國師	思ひ出づる事
茶話數則	其他數十章	

山脇房子先生著

縮刷名著叢書第廿九編

三版

無駄なき生活

彩色函入
正三百九十四頁
送價金 八圓廿錢

生活が困難である、體が忙しく迎も修養などの暇がないと、こんなことを云つて居ながら、世人は案外無駄な生活をやつて居る、所て其無駄を省けば、肉體にも精神にも、餘程の樂が出来るものである、山脇先生が婦人獨特の緻密な觀察から、一々實際の生活上に當拵めて身勞心勞の經濟を説き、以て實踐修養法を示された又と得難い寶典が即ち此の書である、されば家庭にあると學校にあるとを問はず、婦人のふところ鏡とすべきものである。

婦人の本務	結婚論	結婚の選擇
結婚後の注意	主婦の覺悟	婦人と職業
婦人と修養	幸福なる生活	婦人の活動
言行不一致	父時代の訓言	模範的婦人
日常の禮節	娘時代と服裝	嫁入仕度
我家の整理法	其他數十章	

村上浪六先生著

縮刷名著叢書第三十編

人生の裏面

彩色函人 口繪挿入
正三百四 價金四 入壹十 送費 錢圓頁

裏に裏あり、底に底ある人生の裏面は世の中の酸いも甘いも噛み分けたる、苦勞人にあらずんば達觀することを得ず、村上浪六先生、奇警の眼、皮肉の筆、人間世界の奥祕を開いて、讀者をアツと驚かしむるの間、處世の機微を暗示して、痛快骨に徹す、「人生の機微を洞察し痛快と皮肉と滑稽とを一丸とし、縦横自在に人物を活殺するのが浪六の筆である」と評した讀賣子の言は眞に讀者を首肯せしめん、左の目次を御覽遊ばせ。

目	要				
女	こ	お	空	浮	わ
	ほ	世	論	氣	か
三	し	辭		ず	ら
人	屋	屋	家	者	屋
	其	ぶ	冷	發	落
他	る				わ
數		血	明	伍	か
章	屋	漢	家	者	屋
	男	熱	墟	成	い
					た
	三	血		功	づ
				き	ら
	人	漢	屋	者	者

3/
849



終

